

# ヤコブ書における愛の主題

原 口 尚 彰\*

## 抄 録

ヤコブ書の著者とパウロは共に、倫理教説の要として隣人愛（レビ 19:18）の重要性を認識していた（ロマ 13:8-10；ガラ 5:14；ヤコ 2:8）。ヤコブ書は隣人愛の戒めを社会倫理的に解釈し、社会的に弱い立場にある者を助けることや（ヤコ 1:27）、困窮した人に対して憐れみの行為を行うことを勧めている（2:1-12を参照）。これに対して、パウロはレビ 19:18b の隣人愛の戒めが信仰共同体である教会の形成にとり重要であると理解していた（ロマ 13:9；ガラ 5:14を参照）。キリスト教共同体に属する信徒間の愛（兄弟愛）を隣人愛の一つの実現形態と見なして、パウロは信徒たちに愛し合うように強く勧めている（ロマ 12:10；13:8）。ヤコブとパウロの隣人愛の教説は強調点の置き方は異なっているが、相互に矛盾するものではない。

パウロはロマ 12:15においてイエスの愛敵の教えを反映して（マタ 5:44；ルカ 6:27b-28を参照）、「迫害する者を祝福しなさい」と勧めるが、ヤコブ書にはイエスの愛敵の教えの反響が全くない。愛敵の教えの継承に関して両者は対照的である。

**Keywords**：ヤコブ書，公同書簡，愛，倫理，ユダヤ人・キリスト教

## 1. はじめに

著者は聖書における愛の主題に関心を持ち、旧約・ユダヤ教における愛の主題や、パウロ書簡における愛の教説や、ヨハネ福音書における愛の主題に関して考察を行って来た<sup>1</sup>。今回は公同書簡に属するヤコブ書における愛の主題を採り上げ

て、一世紀末から二世紀初めのキリスト教が、初期キリスト教の愛の教説をどのように継承し、展開したのかについて考察してみたい。

ヤコブ書はレビ 19:18 の隣人愛の戒めを重視し、「王の律法」と呼ぶ（ヤコ 2:8）。旧約聖書の隣人愛の戒めを重視し、キリスト者の生き方の土台とすることは、共観福音書伝承にも（マタ 22:34-40；ルカ 10:25-28；マコ 12:28-34）、パウロ書簡にも見られるが（ロマ 13:8-10；ガラ 5:14）、その意味付けや強調点の置き方はそれぞれ異なっている。本研究では特にヤコブ書の愛についての理

\* Haraguchi, Takaaki  
フェリス女学院大学国際交流学部 教授  
日本ルーテル神学校 非常勤講師

解の特色を、共観福音書伝承や、パウロ書簡や他の公同書簡の愛についての議論と対比しながら明らかにしたい。

## 2. ヤコブ書の神学：予備的考察

ヤコブ書は、初期キリスト教におけるユダヤ人キリスト教の流れに位置付けられる。ヤコブ書の神学は、新約聖書の中ではマタイによる福音書の神学に近く、異邦人教会の立場を代表するパウロ書簡の神学とは対照的な立場を示す<sup>2</sup>。この書簡の発信人は「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ」(1:1)と記されている。これは原始教会の中で指導的な地位にあった「主の兄弟ヤコブ」のことであると推定される(ガラ1:19)<sup>3</sup>。ヤコブはイエスの実の兄弟の一人であるが(マコ6:3)、キリストの復活顕現の証人一人ともされている(1コリ15:7)。彼はペトロやヨハネと共にエルサレム教会の柱と呼ばれ、最高指導者の一人に数えられていた(ガラ2:9)。異邦人信徒に対して律法の遵守を求めるべきかどうかについて開催された使徒会議の際に、彼は会議の決定を左右する重要な演説を行った(使15:13-21)。ヤコブはユダヤ人キリスト教の立場を代表する人物であり、ユダヤ人信徒はユダヤの律法を厳格に遵守すべきであると主張していた(ガラ2:12を参照)<sup>4</sup>。尚、ヤコブ書に初代教会のヤコブの著作性が擬されているのは、初期ユダヤ教や原始教会に見られる、権威者から離散の民に宛てた回状の形式を整えようとしたからであろう(IIマカ1:1-10a; 1:10b-2:18; 使15:23-29を参照)<sup>5</sup>。エルサレム教会の代表者である主の兄弟ヤコブは、「離散(ディアスポラ)の十二部族」へ書簡を送って、様々な勧告をするに相応しい権威を持った人物と考えられていたからである<sup>6</sup>。「離散(ディアスポラ)の十二部族」とは、もともと離散のユダヤ人を指す表現であるが、この文脈では比喩的な意味で用いられ、異邦人たちの間に散らされて生活するキリスト教徒たちを指す<sup>7</sup>。

具体的な行為を勧める勧告的要素が強いこの書簡の執筆目的は、外的迫害とこの世(特に富)の

誘惑の中にある信徒たちに指針を示すと共に、パウロ主義に反対して、信仰のみでなく行いも大切であることを強調することである。ヤコブによれば信仰と業は対立するのではなく、信仰は業を通して表現される(2:18-19)。信仰と業は協同し、業によって信仰は完成する(2:20-26)。信仰に加えて行いの重要性を強調することは(1:22-27; 2:8-13, 14-26; 4:11-12)、マタイによる福音書の思想と並行している(マタ5:17-20; 7:21-23, 24-27)。この見解は律法と福音の関係を断絶としてではなく連続としてみる、ユダヤ人キリスト教の立場を代表している。善い行いを伴わない信仰とは真のパウロ主義でなく、誤解されたパウロ主義である<sup>8</sup>。しかし、ヤコブ書は、このような誤解されたパウロ主義だけでなく、「律法の業によらない信仰による義」(ロマ3:21-31; ガラ2:15-21)を唱える真のパウロ主義にも反対している<sup>9</sup>。「行いによって義とされる」という主張は(ヤコ2:21, 24)、パウロ主義の根幹の否定であるからである。マタイ福音書やヤコブ書の存在は、一世紀から二世紀のキリスト教の中に、パウロのように信仰を強調し、律法からの自由を主張するヘレニズム・キリスト教の思想的潮流と、律法を遵守し、行いを重視するユダヤ人キリスト教の潮流が併存し、互いに競い合っていたことを示している。

アブラハム解釈においてヤコブ書が、イサクの奉獻の出来事の中に、試練にあっても神に忠実であったアブラハムの信実(創22:1-9)を見て、そこから創世記15章6節を解釈するのは(ヤコ2:21-23)、初期ユダヤ教の解釈の伝統に従っている(Iマカ2:52; シラ44:19-23)<sup>10</sup>。ユダヤ教では、神への信実(信仰)と行為は二者択一ではなく、むしろ一体をなすと考えられていた。信実は具体的な行為となって表れ、行為を通して行為者の信実を知ることが出来る。しかし、創世記15章6節の箇所から行為義認の主張をする例は他の初期ユダヤ教文献には見られない。創世記15章6節に基づいてアブラハム伝承を解釈し、信仰義認を主張するパウロ主義への対抗上、著者は極端な結論を引き出すに至ったのであろう(ロマ4:3, 9;

ガラ 3:6 を参照)。

ヤコブ書 1 章と 3 章には神より与えられる知恵への言及があるし (ヤコ 1:5-8; 3:13-18)、倫理的勧告に終始するヤコブ書の語り方は知恵文学的である<sup>11</sup>。旧約・ユダヤ教の知恵文学は、世界の起源についての思弁 (箴 8:22-31; 知 9:1-18; シラ 1:1-10)、自然現象についての知見 (ヨブ 38:1-39:30; 知 7:17-22)、処世訓 (箴言 13:21-26, 27-35; 4:10-19; シラ 13:1-8; 20:18-20, 24-26 他多数)、倫理的勧告 (箴言 2:1-15; 3:1-12; シラ 3:1-16; 4:1-10; 5:1-8 他多数) 等様々な要素を包含している。ヤコブ書が主張する知恵の言葉はの中で倫理的勧告の系譜に属する。捕囚期以降、知恵と律法とが結び付き、律法を学ぶことを通して知恵を得ることが強調される (詩 119:65-72; シラ 序 :1-4; 1:26; 15:1; 24:23-34; 45:5)。しかし、ヤコブ書には律法と知恵の関係についての認識論的考察はなく、知恵が神から与えられるものであることと (ヤコ 1:5; 3:15-17)、律法を行うことの強調が見られるだけである (2:8-13)。

他方、ヤコブ書の著者のように、富者を批判し、貧者を擁護することは (ヤコ 1:9-11; 2:1-13; 5:1-6)、新約聖書の中では、ルカ福音書に並行する (ルカ 1:46-55; 6:20-26; 16:19-31)。このことは最初期の教会の信徒の多くは貧しかったが、その後次第にある程度の富を持った会員層が生じてきた歴史的状況を反映している<sup>12</sup>。富者の貪欲を批判し、貧者を擁護するよう勧めることは、旧約・ユダヤ教の知恵文学の中にも見られるし (シラ 4:1-10; 7:32-36; 11:18-21; 13:1-8; 13:15-24; 14:3-10 他)、旧約の預言者たちの社会批判の基調を形成している (イザ 1:15-17; ホセ 12:8-9; アモ 3:9-15; 4:1-3; 5:10-12; 8:4-7 他)。ヤコブ書の富者批判の論調の厳しさは預言者的と言える。

### 3. ヤコブ書における愛の主題

#### 3.1 語学的考察

ヤコブ書において、第四福音書 ἀγαπ- 語群の使用頻度が比較的高い一方で、φιლ- 語群は名詞形が一度しか使用されておらず (ヤコ 4:4)、ヤコブ

書の関心は友愛よりも兄弟愛や隣人愛の方にあることを示している。ヤコブ書において名詞アガペー (ἀγάπη) は一度も使用されていないが、名詞フィリア (φιλία) は一度だけ使用されている (ヤコ 4:4)。また、動詞アガパオー (ἀγαπάω) が 3 回 (ヤコ 1:12; 2:5, 8) 使用されているのに対して、動詞フィレオー (φιλέω) は全く使用されていない。兄弟愛を表す名詞フィラデルフィア (φιλαδέλφια「兄弟愛」) は、全く使用されていない。形容詞アガペートス (ἀγαπητός「愛すべき」「愛されている」) はヤコブ書では 3 回使用されている (1:16, 19; 2:5)。

初代教会の習慣に従って、ヤコブ書は信徒をアデルフォス (ἀδελφός「兄弟」) と呼ぶことが多く、名詞アデルフォスは本文書に合計 19 回使用されている (1:2, 9, 16, 19; 2:1, 5, 14, 15; 3:1, 10, 12; 4:11 [3 回]; 5:7, 9, 10, 12, 19)。さらに、著者は読者に時折、記述の節目においてアデルフォス・ムー・アガペートイ (ἀδελφοί μου ἀγαπητοί「愛されている私の兄弟たち」) と呼び掛け、注意を喚起している (1:16, 19; 2:5)。

憐れみを示す ἐλε- 語群について言えば、動詞エレエオー (ἐλέεω「憐れむ」) は一度も使用されず、名詞エレオス (ἐλεος「憐れみ」) は 3 回使用されている (ヤコ 1:13 [2 回]; 3:17)。これらの語群 (特に、その動詞形) は、共観福音書では主としてキリストの憐れみの行為を表現しているのに対して (マタ 9:27; 17:15; 20:30, 31; マコ 10:47, 48; ルカ 16:24; 17:13; 18:38, 39 を参照)、ヤコブ書では人間に対する神の憐れみと、人間が持つ他者への思いやりを指して使用されている。ヤコ 1:13 は、「人を憐れまない者に対しては、憐れみのない裁きがなされる。憐れみは裁きに打ち勝つ」と述べている。尚、動詞スプランクニゾマイ (σπλαγχνίζομαι「同情する」「深く憐れむ」) や名詞スプランクノン (σπλάγχνον「同情」「深い憐れみ」) はヤコブ書に使用されていないが、同根の形容詞スプランクノス (σπλάγχνός「憐れみ深い」) が形容詞オイクティルモーン (οἰκτίρμων「情け深い」) と共に神の形容として用いている例が見られる (5:11)。

## 3.2 愛の主題の展開

### 3.2.1 神の愛と神への愛

ヤコブ書において神の愛は、愛についての議論の前提となっていると考えられる。例えば、著者はしばしば読者に「愛されている私の兄弟たち」と呼び掛けているが（1:16, 19; 2:5）、この場合、信徒たちを愛する主体は、第一義的に神であり、第二義的に著者を含む他の信徒たちであろう。また、神は「憐れみ深く、情け深い」とされており（5:11）、人間に対する神の深い愛を前提に、試練の中でも神に信頼しつつ忍耐して待つことが勧められている。

初代教会において、信徒たちは神を愛する者であるとされていた（マタ 22:34-40; ルカ 10:25-28; マコ 12:28-34; ロマ 8:28; I コリ 2:9; 8:3 を参照）。ヤコブ書によれば、神を愛する者に対しては、終末時に「命の冠」を得ることや、神の国を嗣ぐ者となることが約束されている（ヤコ 1:12; 2:5）。こうした発言の背後には、旧約・ユダヤ教的思考が存在している。旧約聖書において、イスラエルは奴隷の地であるエジプトから民を導き出した主を愛し、その戒めを守ることが求められているが（出 20:6; 申 5:10; 王上 3:3; 詩 31:24; 116:1）、主を愛する者に対して、神は契約を守って慈しみ与えることが約束されている（申 5:10; 7:9; 19:9）<sup>13</sup>。

ヤコブ書の著者は冒頭で自ら「神とキリストの僕」と名乗り（1:1）、「私たちの栄光の主イエス・キリスト」への信仰を持つことを表明している（2:1）<sup>14</sup>。また、キリストの来臨についての言及も存在する（ヤコ 5:7-11）。しかし、ヤコブ書は愛の主題に関してキリストに言及することはなく、キリスト論的基礎の上に愛の教説を展開する視点が弱い。この点は、「イエス・キリストの僕であり、福音のための聖別された使徒」と名乗るばかりでなく（ロマ 1:1）、罪人のために死んだキリストの死の中に神の愛とキリストの愛の決定的啓示を見て、キリスト論的な基礎の上に愛の教説を展開するパウロの立場や（ロマ 5:6-8; 8:34-35, 39; ガラ 2:20 を参照）、「キリストもあなたが

たのために苦しみ」（2:21）、「私たちの罪を身に負って木に架かったのは、私たちが罪に対して死んで義に生きるためである」（2:24）と述べて、キリストの十字架上の死の中に罪人である人間への愛の表出を見るIペトロ書の立場と対照的である。キリスト論的要素を欠いたヤコブの愛の教説は、旧約・ユダヤ教の倫理教説の延長線上に留まっていると評価出来るであろう<sup>15</sup>。

### 3.2.2 隣人愛

ヤコブ書はレビ 19:18 の隣人愛の戒めを重要な戒めとして引用し、「王の律法」と呼ぶ（ヤコ 2:8）<sup>16</sup>。パウロは隣人愛の戒めを律法の総括として引用するが（ロマ 13:8-10; ガラ 5:14）、ヤコブは隣人愛の戒めによって律法を総括するのではなく、他の戒めと並ぶ主要な戒めの一つとして引用している<sup>17</sup>。隣人愛の戒めの同様な扱いは同時代のユダヤ教文書の一部にも見られる（ヨベ 7:20; 20:2; 36:4; ガド遺 4:2 を参照）<sup>18</sup>。ヤコブは隣人愛の戒めに言及すると共に、「殺してはならない」（出 20:13）、或いは、「姦淫してはならない」（20:14）といった十戒に含まれる戒めを、キリスト者がなお守るべき行為規範として引用するのである（ヤコ 2:8-11 を参照）。尚、一部の研究者は、2:19a で「神は唯一である」（申 6:4）という句が引用されていることを根拠にして、ヤコブが神への愛を命じる申 6:5 の戒めと隣人愛を命じるレビ 19:18 の戒めを結び付けて考えているとしている<sup>19</sup>。ヤコブは「あなたがたは『神は唯一である』と信じている」（ヤコ 2:19a）という発言の直後に、悪霊ですらそう信じているという趣旨の皮肉な発言をしている（2:19b）。ここで、ヤコブは全身全霊をもって神を愛することを勧める申 6:5 を引用しておらず、ヤコブが隣人愛の戒めとシェマーを結び付けていると主張するのは無理な読み込みである。

隣人愛の戒めは、ヤコブ書の他の箇所では「完全な、自由の律法」とも呼ばれている（ヤコ 1:25; 2:12）。信仰と行いの関係について、ヤコブとパウロは対照的な理解を示しているが、隣人愛



と自由を重視することに関しては一致が見られる（ガラ 5:13-14 を参照）。但し、パウロが律法の軛から解放されることを自由の本質と考えていたの対して（ガラ 2:4; 5:1 を参照）、ヤコブは律法が人間を拘束し、隷属させるものとは考えず、むしろ、同時代のユダヤ教の理解と同様に（『ミシュナ』「アボート」6.2; 『創世記ラッパ』53.7; フィロン『言語の混乱』94-95; 『自由論』45 他）律法が人間に自由をもたらすものと考えている<sup>20</sup>。また、隣人愛をどう実行するかということについて、両者の向かう関心の方向は大きく異なる。

ヤコブ書は隣人愛の具体的実践として、やもめや孤児のような社会的に弱い立場にある者を助けることや（ヤコ 1:27）、困窮した人に対して憐れみの行為を行うことを考えている（2:1-12 を参照）。特に、2 章の文脈では、礼拝に訪れて来た富裕で身なりの良い者と貧しい身なりの者を公平に取り扱わないことが、隣人愛の戒めの侵害となり、ひいては、律法全体の違反となることが強調している<sup>21</sup>。ヤコブ書は申命記や預言書が強調している社会的弱者保護の精神に立ちながら（申 10:18; 24:14-22; 26:12-13; イザ 1:17; エレ 7:5-6; エゼ 22:6-13; ホセ 6:6; 12:7; アモ 4:1-3; 5:10-12 他を参照）、隣人愛の戒めを社会倫理的に解釈し、日常生活の中に生かそうとしていると言える。旧約偽典の『十二族長の遺訓』「イッサカル」5:2 は、「主と隣人を愛し、貧しい者や弱い者に同情せよ」と述べ、神への愛と隣人への愛は社会的弱者への同情という形で表現されることを強調している（遺イッサカル 5:1-2; 7:6; 遺ゼブ 8:3 も参照）<sup>22</sup>。ヤコブ書の隣人愛解釈はユダヤ教の律法解釈の一つの流れを継承しながら、一世紀末から二世紀初めのキリスト教徒が日常的に直面していた社会的現実に応用したものであろう。

他方、ヤコブはキリスト教共同体も隣人愛の実践対象として考えている。ヤコブ書の著者は、兄弟の悪口を言うことや裁くことを戒めているが、そのことが隣人愛の戒めに背き、「隣人を裁く」ことになるからである（ヤコ 4:11-12）<sup>23</sup>。「兄弟たち」（4:115:7, 9, 12 他）と呼ばれる共同

体の構成員たちは、互いに罪を告白し、互いのために祈り合い、迷い出た者を真理へと引き戻すことが求められている（5:16, 19-20）。

### 3.2.3 愛敵

隣人愛の戒めは民族共同体内部の倫理的規範であり、相互の連帯を前提にしているが、愛敵は共同体外の敵対する者にまで愛の対象を広げることによって相互性・互惠性の原則を超えている。敵の不幸を喜ばずに窮状にある敵に親切にするようにという勧めは旧約聖書の中に見られるが（出 23:4-5; 箴 24:17; 25:21）、敵を積極的に愛するように勧める戒めは存在しない。応報の原理や相互性の原理を越えた愛敵の教えは、イエス特有の教えであり、他には見られない初期キリスト教のエートスを形成していた（ルカ 6:27b-28; マタ 5:44; デイダケー 1:3 を参照）。愛敵の教えをどのように継受していたかは、初期キリスト教でなされた様々な倫理的勧告を評価するための重要な視点を提供している。

愛敵の勧めはマルコ福音書には伝えられず、マタイ福音書とルカ福音書だけが伝えるイエスの語録の一つであり（マタ 5:44; ルカ 6:27）、他に例がない先鋭な教えであることから最終的には史的イエスに遡ると推定される。ヤコブと同様にユダヤ人キリスト教の立場を反映するマタイ福音書は愛敵の教えを重視して、旧約聖書の隣人愛の戒めを凌駕する反対命題として提示し（マタ 5:43-44）、「律法学者やファリサイ派の義に優る義」（5:20）の具体的例示としている。マタイによれば、愛敵は「悪人の上にも、善人の上にも太陽を昇らせ、義人にも不義なる者にも雨を降らせる」創造主なる天の父の寛容に倣い「神の子となる」ことを意味する（5:45）。

パウロはロマ 12:15 において、「迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない」と勧めている（12:15）。この文章の最初の部分は、イエスの愛敵の教えを伝える共観福音書伝承や（ルカ 6:27b-28 「あなた方の敵を愛しなさい。あなた方を憎む者達に良い仕打ちをしなさい

い。あなた方を呪う者を祝福し、あなた方を憎む者たちのために祈りなさい」。さらに、マタ 5:44 も参照)、使徒教父文書を思い起こさせる(ディダケー 1:3「あなた方を呪う者達を祝福し、あなた方の敵のために祈りなさい」を参照)。

ヤコブ書と共に公同書簡に属するIペトロ書も、「最後に、皆が同じ思いで、同情し、兄弟を愛し、憐れみ深く、へりくだり、悪に悪をもって、侮辱に侮辱をもって報いず、かえって祝福しなさい。あなたがたは祝福を継ぐために召されたのだから」と述べ(3:8-9)、相互性の原理や応報原理を越える姿勢を示している<sup>24</sup>。特に、「悪に悪をもって、侮辱に侮辱をもって報いず、かえって祝福しなさい」という部分は、「迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない」と勧めるパウロの言葉に並行している(ロマ 12:15 を参照)<sup>25</sup>。

これに対して、ヤコブ書にはイエスの愛敵の教えの反響が全くない。先に、ヤコブ書にはキリスト論的基礎の上に愛の教説を展開する視点が弱いことを確認したが、イエス独自の教えであり、イエス自身が十字架に向かう歩みにおいて実践した愛敵の勧めが見られないことも、イエスの生涯を模範として捉え、イエスに倣おうとする視点が弱いことの表れであろう。そのことは応報原理を越えるイエスの愛の教えがヤコブ書において十分に継受されず、ユダヤ教的倫理原則を十分に乗り越えていないことを意味する。

#### 4. 結論と展望

ヤコブ書の著者とパウロは共に隣人愛の戒め(レビ 19:18)を倫理教説の要として重視している(ロマ 13:8-10; ガラ 5:14; ヤコ 2:8)。ヤコブ書は隣人愛の戒めを社会倫理的に解釈し、隣人愛の具体的実践として、社会的に弱い立場にある者を助けることや(ヤコ 1:27)、困窮した人に対して憐れみの行為を行うことを考えていた(2:1-12 を参照)。これに対してパウロは教会指導者として、レビ 19:18b の隣人愛の戒めも、信仰共同体である教会に向けられていると理解した(ロマ 13:9;

ガラ 5:14 を参照)。彼はキリスト教共同体に属する信徒間の愛(兄弟愛)を隣人愛の一つの発現形態と考えて、信徒たちに相互に愛し合うことを強く勧めた(ロマ 12:10; 13:8)。ヤコブとパウロの隣人愛の教説は強調点の置き方はかなり異なっているが、相互に矛盾するものではない。

パウロはロマ 12:15 においてイエスの愛敵の教えを継承し(マタ 5:44; ルカ 6:27b-28 を参照)、「迫害する者を祝福しなさい」と勧めるが、ヤコブ書にはイエスの愛敵の教えの反響が全くない。応報原理を越えるイエスの特有の教えである愛敵の教えの継承に関して、両者は対照的である。

#### 参考文献

##### 1. 邦語文献

- 川村輝典「ヤコブの手紙」『総説 新約聖書』日本基督教団出版局、1981年、404-414頁;  
同「ヤコブの手紙」『新共同訳 新約聖書注解 II』日本基督教団出版局、1991年、391-409頁  
辻学『ヤコブの手紙』新教出版社、2002年  
同「ヤコブ二章における『誤れるパウロ主義』について」『神学研究』第38号、1991年、145-164頁  
同『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年  
原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004年  
同「ディアスポラ書簡としての初期キリスト教書簡」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第31号、2013年、1-18頁  
同「アガペーとしてのフィリア」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第32号、2014年、1-18頁  
同「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第1号、2016年、21-42頁  
同「旧約・ユダヤ教における愛の主題」青山学院大学神学科同窓会基督教学会『基督教論集』第59号、2017年、87-107頁  
A・チェスター「ヤコブの神学」A・チェスター/R・マーティン(辻学訳)『公同書簡の神学』新教出版社、2003年、1-76頁

##### 2. 外国語文献

- Allison, D. C. *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of James* (ICC; New York: Bloomsbury T & T Clark, 2013).  
Avemarie, F. "Die Werke des Gesetzes im Spiegel des Jakobusbriefes," *ZTK* 98 (2001) 282-309.  
Baasland, E. "Der Jakobusbrief als neutestamentliche

- Weisheitsschrift," *ST* 36 (1982) 119-139.
- Burchard, C. *Der Jakobusbrief* (HBNT 15/1; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2000).
- \_\_\_\_\_. "Nächstenliebegebot, Dekalog und Gesetz in Jak 2,8-11," in *Die Hebräische Bibel und ihre zweifache Nachgeschichte* (FS. R. Rendtorff; hrsg. v. E. Blum / C. Macholz / E. W. Stegemann; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1990) 517-534.
- Chilton, B. "Wisdom and Grace," in *Missions of James, Peter, and Paul* (eds. B. Chilton / C. Evans; Leiden: Brill, 2005) 307-321.
- Dibelius, M. *Der Brief des Jakobus* (ergänzt von H. Greeven; 11. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1964).
- Frankemölle, H. "Zum Thema des Jakobusbriefes im Kontext der Rezeption von Sir 21,1-18 und 15,11-20," *BN* 48 (1989) 21-49.
- \_\_\_\_\_. *Der Brief des Jakobus* (ÖTKNT 17/1-2; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 1994).
- Frey, J. et al. (Hg.). *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (WUNT 246; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009).
- Furnish, V. *The Love Command in the New Testament* (Nashville - New York: Abingdon, 1972).
- Gemünden, P. v. / M. Konradt / G. Theissen. *Der Jakobusbrief. Beiträge zur Rehabilitierung der "strophernen Epistel"* (Münster: LIT Verlag, 2003).
- Hengel, M. "Der Jakobusbrief als antipaulinische Polemik," in *Tradition and Interpretation in the New Testament* (eds. G. F. Hawthorne / O. Betz; Grand Rapids: Eerdmans, 1987) 248-278.
- Hoppe, R. *Der theologische Hintergrund des Jakobusbriefes* (Würzburg: Echter, 1987).
- Hübner, H. *Biblische Theologie* (3 Bde; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990-95).
- Jackson-McCabe, M. "The Politics of Pseudepigraphy and the Letter of James," in *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (hrsg. V. J. Frey et al.; WUNT 246; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009) 599-623.
- Klein, T. *Bewährung in Anfechtung. Der Jakobusbrief und der Erste Petrusbrief als christliche Diasporabriefe* (Tübingen: Francke, 2011).
- Kloppenborg, J.S. "Diaspora Discourse: The Construction of *Ethos* in James," *NTS* 53 (2007) 242-270.
- Konradt, M. *Christliche Existenz nach dem Jakobusbrief. Eine Studie zu seiner soteriologischen und ethischen Konzeption* (SUNT 22; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998).
- \_\_\_\_\_. "Jakobus der Gerechte," in *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (hrsg. V. J. Frey et al.; WUNT 246; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009) 575-597.
- Lohse, E. "Glaube und Werke. Zur Theologie des Jakobusbriefes," *ZNW* 48 (1957) 1-22.
- Luck, U. "Die Theologie des Jakobusbriefes," *ZTK* 81 (1984) 1-30.
- Lüdemann, G. *Paulus, der Heidenapostel* (FRLANT 139; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987).
- Maier, G. *Der Brief des Jakobus* (Wuppertal: Brockhaus - Brunnen, 2004).
- Martin, R. P. *James* (WBC 48; Waco, TX: Word, 1988).
- McKnight, S. *The Letter of James* (Grand Rapids, MI - Cambridge, UK: Eerdmans, 2011).
- Metzner, R. *Der Brief des Jakobus* (Theologischer Handkommentar zum Neuen Testament. Bd.14). Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2017.
- Mongstad-Kvammen, I. *Toward a Postcolonial Reading of the Epistle of James: James 2:1-13 in its Roman Imperial Context* (Leiden - Boston: Brill, 2013).
- Mussner, F. *Der Jakobusbrief* (Freiburg i.Br.; Herder, 1981).
- Niebuhr, K.-W. "Der Jakobusbrief im Licht Frühjüdischer Diasporabriefe," *NTS* 44 (1998) 420-443.
- Perkins, P. *Love Commands in the New Testament* (New York - Ramsey: Paulist, 1982).
- Piper, J. *Love your Enemies* (Wheaton, IL: Crossway, 1979).
- Popkes, W. *Adressaten, Situation und Form des Jakobusbriefes* (SBT 125/126; Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1986).
- \_\_\_\_\_. *Der Brief des Jakobus* (THKNT 17/1-2; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2001).
- Ruzer, S. "James on Faith and Righteousness," in *New Approaches to the Study of Biblical Interpretation in Judaism of the Second Temple Period and in Early Christianity* (eds. G. A. Anderson / R. A. Clements / D. Satran; Leiden: Brill, 2013) 86-91 を参照。
- Tsuiji, M. *Glaube zwischen Vollkommenheit und Verweltlichung. Eine Studie zur literarischen Inhalt und Kohärenz des Jakobusbriefes* (WUNT II 93; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1997).
- Wick, P. *Der Brief des Jakobus* (Theologischer Kommentar zum Neuen Testament. Bd.18;

Stuttgart: Kohlhammer, 2017).

Wischmeyer, O. *Liebe als Agape. Das frühchristliche Konzept und der moderne Diskurs* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).

# 注

- 1 原口尚彰「アガペーとしてのフィリア」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 32 号、2014 年、1-18 頁；同「パウロにおける愛の教説」フェリス女学院大学キリスト教研究所『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第 1 号、2016 年、21-42 頁、同「旧約・ユダヤ教における愛の主題」青山学院大学神学科同窓会基督教学会『基督教論集』第 59 号、2017 年、87-107 頁を参照。
- 2 原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館、2009 年、150-152 頁を参照。
- 3 M. Dibelius, *Der Brief des Jakobus* (ergänzt von H. Greeven. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht,<sup>11</sup> 1964) 24-26; F. Mussner, *Der Jakobusbrief* (Freiburg i.Br.: Herder, 1981) 1-8; R. P. Martin, *James* (WBC 48; Waco, TX: Word, 1988) 3-5; H. Frankemölle, *Der Brief des Jakobus* (ÖTKNT 17/1-2; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 1994) I 125; C. Burchard, *Der Jakobusbrief* (HBNT 15/1; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2000) 3; W. Popkes, *Der Brief des Jakobus* (THKNT 17/1-2; Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2001) 64-68, 70; G. Maier, *Der Brief des Jakobus* (Wuppertal: Brockhaus - Brunnen, 2004) 33-34; S. McKnight, *The Letter of James* (Grand Rapids, MI - Cambridge, UK: Eerdmans, 2011) 23-34, 62-63; D. C. Allison, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of James* (ICC; New York: Bloomsbury T & T Clark, 2013) 3-32; 辻学『ヤコブの手紙』新教出版社、2002 年、13-19 頁を参照。これに対して、R. Metzner, “Der Lehrer Jakobus. Überlegungen zur Verfasserfrage des Jakobusbriefes,” *ZNW* 104 (2013) 238-267 は、ヤコブという名の他では知られていない教師であるとしている。
- 4 原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004 年、102-103 頁を参照。
- 5 辻、19-26 頁；K.-W. Niebuhr, “Der Jakobusbrief im Licht Frühjüdischer Diasporabriefe,” *NTS* 44 (1998) 420-443; G. Theissen, “Die pseudepigraphie Intention des Jakobusbriefes. Ein Beitrag zu seinen Einleitungsfragen,” P. v. Gemünden / M. Konradt / G. Theissen, *Der Jakobusbrief. Beiträge zur Rehabilitierung der “strohern Epistel”* (Münster: LIT Verlag, 2003) 54-82; J. S. Kloppenborg, “Diaspora Discourse: The Construction of *Ethos*

- in James,” *NTS* 53 (2007) 267-270; T. Klein, *Bewährung in Anfechtung. Der Jakobusbrief und der Erste Petrusbrief als christliche Diasporabriefe* (Tübingen: Francke, 2011) 182-224, 274-347; Allison, 127-128 を参照。これに対して、Martin, 3-6; Maier, 33-42; McKnight, 23-34 はこの文書の真筆性を主張し、主の兄弟ヤコブが執筆したものであるとしている。
- 6 Dibelius, 23-35; Mussner, 1-11; M. Konradt, “Jakobus der Gerechte,” in *Pseudepigraphie und Verfasserfiktion in frühchristlichen Briefen* (hrsg. v. J. Frey et al.; WUNT 246; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2009) 575-597; M. Jackson-MacCabe, “The Politics of Pseudepigraphy and the Letter of James,” *ibid.*, 599-623.
  - 7 Dibelius, 95; Mussner, 61; Frankemölle, I 127; Popkes, 72; M. Tsuji, *Glaube zwischen Vollkommenheit und Verweltlichung. Eine Studie zur literarischen Inhalt und Kohärenz des Jakobusbriefes* (WUNT II 93; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1997) 18-50; Burchard, 6; Theissen, 60-61; 辻、49 頁を参照。尚、ディアスポラ概念の再定義に関しては、「ディアスポラ書簡としての初期キリスト教書簡」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 31 号、2013 年、1-18 頁を参照。これに対して、Kloppenborg, 242-255 は、ヤコブ書が想定する読者がキリスト教徒だけでなく、離散のユダヤ人も含むと考えている。
  - 8 Mussner, 17-19; E. Lohse, “Glaube und Werke. Zur Theologie des Jakobusbriefes,” *ZNW* 48 (1957) 1-22; G. Lüdemann, *Paulus, der Heidenapostel* (FRLANT 139; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987) 214; M. Konradt, *Christliche Existenz nach dem Jakobusbrief. Eine Studie zu seiner soteriologischen und ethischen Konzeption* (SUNT 22; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998) 241-248; U. Schnelle, *Theologie des Neuen Testaments* (UTB 2917; 2. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2014) 586-591; 川村輝典「ヤコブの手紙」『総説 新約聖書』日本基督教団出版局、1981 年、404-414 頁；同「ヤコブの手紙」『新共同訳 新約聖書注解 II』日本基督教団出版局、1991 年、391-409 頁は、ヤコブ書は真のパウロ主義ではなく、誤解されたパウロ主義に反対しているとする。
  - 9 辻『ヤコブの手紙』140-148 頁；同「ヤコブ二章における『誤れるパウロ主義』について」『神学研究』第 38 号 (1991 年) 145-164 頁; Tsuji, 172-199; M. Hengel, “Der Jakobusbrief als antipaulinische Polemik,” *Tradition and Interpretation in the New Testament* (eds. G. F. Hawthorne / O. Betz; Grand Rapids: Eerdmans,



- 1987) 248-278; H. Hübner, *Biblische Theologie* (3 Bde; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1990-95) II 380-386; F. Avemarie, "Die Werke des Gesetzes im Spiegel des Jakobusbriefes," *ZTK*98 (2001) 282-309 を参照。
- 10 S. Ruzer, "James on Faith and Righteousness," in *New Approaches to the Study of Biblical Interpretation in Judaism of the Second Temple Period and in Early Christianity* (eds. G. A. Anderson / R. A. Clements / D. Satran; Leiden: Brill, 2013) 86-91 を参照。
- 11 E. Baasland, "Der Jakobusbrief als neutestamentliche Weisheitsschrift," *ST* 36 (1982) 119-139; U. Luck, "Die Theologie des Jakobusbriefes," *ZTK* 81 (1984) 1-30; R. Hoppe, *Der theologische Hintergrund des Jakobusbriefes* (Würzburg: Echter, 1987) 18-71; H. Frankemölle, "Zum Thema des Jakobusbriefes im Kontext der Rezeption von Sir 21,1-18 und 15,11-20," *BN* 48 (1989) 21-49; idem., *Der Brief des Jakobus* (ÖTKNT 17/1-2; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 1994) I 81-88; I. Mongstad-Kvammen, *Toward a Postcolonial Reading of the Epistle of James: James 2:1-13 in its Roman Imperial Context* (Leiden - Boston: Brill, 2013) 39-43; Schnelle, 579-580; 原口『神学概説』151 頁を参照。尚、B. Chilton, "Wisdom and Grace," in *Missions of James, Peter, and Paul* (eds. B. Chilton / C. Evans; Leiden: Brill, 2005) 307-321 は、主の来臨を強調する黙示的要素を併せ持った(ヤコ 1:5-11; 5:7-11) 知恵文学的な文書であるとしている。
- 12 W. Popkes, *Adressaten, Situation und Form des Jakobusbriefes*(SBT125/126; Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1986) 53-89 を参照。
- 13 原口尚彰「旧約・ユダヤ教における愛の主題」『基督教論集』第 59 号、2017 年、90 頁を参照。
- 14 Schnelle, 581 はこの点に着目し、ヤコブの神学にもキリスト論が欠如していないと主張している。
- 15 V. Furnish, *The Love Command in the New Testament* (Nashville - New York: Abingdon, 1972) 181 も同趣旨。
- 16 このことのユダヤ教的背景については、Ruzer, 86-91; Allison, 406-408 を参照。
- 17 Dibelius, 177; Furnish, 179; Popkes, 141-142; O. Wischmeyer, *Liebe als Agape. Das frühchristliche Konzept und der moderne Diskurs* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015) 41-42; 辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010 年、118 頁を参照。
- 18 P. Perkins, *Love Commands in the New Testament* (New York - Ramsey: Paulist, 1982) 87.
- 19 Allison, 408.
- 20 Allison, 337-339; Ruzer, 91-96 を参照。
- 21 Mussner, 123-124; Allison, 408-410 を参照。
- 22 Konradt, *Christliche Existenz*, 181-194; 尚、『十二族長の遺訓』の訳文は、日本聖書学研究所編『聖書外典典 5 旧約外典偽典 III』教文館、1976 年、295 頁からの引用である。
- 23 Perkins, 87-88; Konradt, 192-194; C. Burchard, "Nächstenliebegebot, Dekalog und Gesetz in Jak 2,8-11," in *Die Hebräische Bibel und ihre zweifache Nachgeschichte* (FS. R. Rendtorff; hrsg. v. E. Blum / C. Macholz / E. W. Stegemann; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1990) 525-526.
- 24 Perkins, 91.
- 25 J. Piper, *Love your Enemies* (Wheaton, IL: Crossway, 1979) 5-8; Perkins, 92 は両者の背後に共通の伝承の存在を想定している。

## The Theme of Love in the Epistle of James

Takaaki Haraguchi

Both James and Paul have recognized the commandment of neighborly love (Lev 19:18) as a cornerstone of ethical life of Christians (see Romans 13:8-10; Galatians 5:14; James 2:8). The author of James interprets the love command from the socioethical perspective. He thus exhorts his readers to help those in need and show mercy toward the socially weak (James 1:27; 2:1-12). Paul understands that the command of love of neighbor is crucially important for forming the Christian communities. As the brotherly love among Christians is thought to be a concrete expression of neighborly love, he urgently exhorts his readers to love one another (Romans 12:10; 13:8). The ethical teachings of James and Paul are not mutually exclusive, though they are putting stress on different aspects of neighborly love.

On the other hand, Paul exhorts his readers to “bless those who persecute you” (Romans 12:15). Paul’s remark echoes the command of enemy love given by Jesus (Matthew 5:44; Luke 6:27b-28). Nevertheless, there is no reference to the theme of love of enemies in James. As far as this unique teaching of Jesus is concerned, Paul and James show the opposite attitudes.

**Keywords:** The Epistle of James, The Catholic Epistles, Love, Ethics, Jewish Christianity